

「伊賀一筆」復刊兼再終刊号（通巻二号）改元記念抜刷先行版増補篇 令和元年（二〇一九）六月一日発行

あらたふと資料収集五十年

中
相
作



名張市公認

目次

僕の図書館戦争 名張死闘篇	182
昭和平成ずんべらぼん回顧	
アレクサンドリアは永遠に	
市制施行六十周年の大予言	
伊賀市と連携どうでしょう	
江戸川乱歩・横光利一	206
汽笛とトンネル	
乱歩と名張	
横光と伊賀	
旅愁と郷愁	
追記	
僕の図書館戦争 民間人作戦	210
忍法の秘術尽くせり旧庁舎	
後記 謝辞	

あらたふと 資料収集 五十年

中 相作 様

市長への手紙をお寄せいただきありがとうございました。

平成30年4月6日付でお尋ねのありましたことについて、以下のとおり回答させていただきます。

乱歩関係資料を収集する方法として、購入はせず書誌データだけを収集して記録しておくことについては、貴重なご提案として受けとめさせていただきます。しかしながら、資料の購入に掛かる経費は必要としないものの、日々の出版情報の中から乱歩関係資料となる書誌データを収集し、それを記録するためには、それなりの時間と労力を継続してかけていく必要があります。したがって、市立図書館の運営形態の現状の中でそういったことができるかどうかについて見極めてまいりたいと考えています。

平成30年4月13日

名張市長 ○○○○

僕の図書館戦争

名張死闘篇

昭和平成ずんべらぼん回顧

「えらいたこつくおめでしたなでおなじみの○○○○先生が名張市長を義務やったときのことですけど」

「いきなりなんちゅうこと口走るんですか」

「平成十四年お正月のお話です」

「そんな昔の話を持ち出して君も相変わらずしつこいですね」

「名張市に伊和新聞という地方紙がありまして」

「何か面白い記事が載ってましたか」

「○○○○先生の新春インタビュー」

「市長さんに展望や抱負を語っていただけ新年ならではの企画ですね」

「じつはその前の年がえらい年やったんです」

「前年は平成十三年ですから西暦でゆうたら二〇〇一年ですか」

「二十一世紀最初の年でした」

「いよいよ新世紀が開幕しました」

「その輝かしい年に名張市の人口減少が始まりました」

「全然輝かしくないやないですか」

「平成十二年十月一日の名張市の人口は八万五千三百六十二人でした」

「それが一年後には」

「八万五千三百五十人」

「毎年増えつつけていた人口がぐくわずかながら減少したわけですね」

「それからは減るいつぼうです」

「ちなみに平成最後の十月一日には」

「七万八千八百六十四人」

「名張市は衰退一直線ですか」

「てゆうかももう日本社会全体が衰退一直線でお先真つ暗な状態ですから」

「いまだかつてどこの国も経験したことのない急激な少子高齢化が進行しているとかいわれてます」

「人口減少も半端ありませんし」

「日本は重大で深刻な問題をふたつも抱えてるわけですからね」

「諸外国からは奇跡のツートップと賞賛を集めてまして」

「あほなことゆうてたらあきません」

「平成十三年の名張市はそんな状態やつたんですけど東京では江戸川乱歩がえらいことになってまして」

「なんの話ですねん」

「乱歩令息の平井隆太郎先生が池袋にある乱歩邸をまるごと豊島区に譲渡されるという話が進んでたんです」

「まるごとですか」

「土地建物から乱歩の蔵書まで一切合切です」

「豊島区はそれどうしますねん」

「乱歩邸を乱歩記念館として整備する構想を打ち出しました」

「結構な話やないですか」

「ところが財政難を理由に豊島区が乱歩記念館を断念してしもたんです」

「たしかにえらいことです」

「けど世の中ようしたもんでね」

「どないになりました」

「乱歩邸の隣にある立教大学が名乗りをあげてくれました」

「名乗りといいますと」

「乱歩邸をまるごと引き取ってくれることになりました」

「そらよろしおましたな」

「その年のうちに一件落着めでたしめでたしとはなつたんですけど」

「どないしました」

「えらいたこついた先生の新春インタビューです」

「たこついたとかやすあがつたとかそうゆう話題はいいですから」

「乱歩邸のことに水を向けられた先生は下段の①みたいな感じでひそかに教育委員会を通じて平井先生と連絡を取

っていたとお答えになりました」

「いわゆる水面下の交渉ですか」

「僕もう激怒してしまいましたね」

「なんでですねん」

「かりそめにも市長たる者がそんな大うそついでどないするねんころと」

「大うそかどうかわかりませんがな」

①

——乱歩邸は残念な話になりましたね。

市長 ちよつと豊島区（東京）が横暴すぎた。私は蔵だけ頂こうと、ひそかに平井先生（平井隆太郎・立教大名誉教授）江戸川乱歩の長男）と市教委を通して連絡を取っていました。ところが、豊島区が本宅や蔵書・調度品など貴重な資料を含め、まとめて1億円で購入するという条件を整えてしまったため手を引いた。ところが財政難で豊島区が断念。ご存じの結果となった。といって当市が1億円かけて邸宅まで買い、資料室も経営する訳にもいかずあきらめざるを得なかつた。小分けして頂ければ有り難かつたのですがね。

——それで今後は。

市長 いろんな展示会などをするとき、立教大に資料をお借りするような交渉があらうかと思つています。ただ、有り難いことに、慶応大学の推理小説クラブと言うか、ミステリークラ

「たしかにそのとおりです」

「怒るのは君の勝手ですけど単なる思
い込みで決めつけたらあきません」

「ですから僕は新年早々教育委員会の
トップでいらっしやった教育長の○○

○先生に文書を提出いたしました」

「いったい何を書いたんですか」

「おのれら教育委員会はほんまに平井
隆太郎先生と連絡を取ったのか」

「おのれらゆうたらあきませんがな」

「市長がゆうとるミステリーの拠点づ
くりたらゆうたわごとのことをこら教
育委員会は知つとるのかこら」

「こらこらゆうたらあきませんがな」

「ところが待てど暮らせどお返事をい
ただけません」

「教育長さんもお忙しいでしょうし」

「僕もう激怒してしまいましたね」

「またですか」

「返事もでけへんのかこら」

「こらこらばつかりゆうてましたか」

「インターネットで大騒ぎ」

「君そんなばつかりですがな」

「それでもお返事はいただけません」

「もう諦めたらどないですか」

「かりそめにも教育の看板せたるた人
間が市長の大うそかばいだてする気が
こらこの教育長がこらあッ」

「ええ加減にしとかなあきませんで」

「そしたらえらいもんで名張市役所の
教育長室でいつペン話し合いましよゆ
うことになりましたね」

「君いったいどこまで行くんですか」

「そのあと教育委員長の○○○先生か
ら文書も頂戴しました」

「教育長とは別に教育委員長ですか」

「教育長は校長先生のOBで教育委員
長は土地の名士ゆうのが全国的な通り
相場やつたんですけど教育委員長ゆう
ポストはその後廃止になりました」

「それで土地の名士の教育委員長さん
からどんなお答えがあつたんですか」

ブが毎年名張で研修会を開いており、
そのOBたちが将来、自分たちの蔵書
を全部名張へ寄付しようと思統一さ
れている。中には価値の高いものもあ
るでしょう。そういう中で、新たな江
戸川乱歩にちなんだミステリーの拠点
を作りたいと思っています。

*名張人外境「名張市立乱歩記念
館の幻」から転載。

【②】

図書館の業務としての乱歩顕彰

こうして市図書館内の乱歩コーナー
は、乱歩先生の幾つかの遺品と、少し
ばかりの資料の展示で格好だけはつけ
たものの、こんなことで乱歩顕彰など
と大きな事が云えるだろうか。資料の
収集となると莫大な資金が必要となる。
市内に乱歩の資料が残されているだろ
うか。などなど館の内部で色々議論を
したのを覚えています。

・予算の許す限り資料の収集を続ける。
・乱歩のみに限らずミステリーに関す
るものを収集する。

・江戸川乱歩賞受賞者に接近し著書サ

「僕をなだめるお答えでした」

「まあそうゆうお立場でしょうから」

「それから昔名張市に乱歩記念館をつくる構想があったゆう話とかですね」

「そんなことありましたんか」

「乱歩記念館とかそんな名張市には必要ないんですけど」

「げんにできてませんから」

「そんなことより教育委員長のお返事を読んで僕はびつくりしましたね」

「何にびつくりしました」

「名張市立図書館の乱歩関連資料収集について下段の②が書かれてました」

「いろいろ書いてもろてますけど」

「名張市立図書館が新築移転したとき館内に乱歩コーナーをつくりましたゆう話の流れで資料の収集となると莫大な資金が必要となるとか市内に乱歩の資料が残されているだろうかとかそんなあほなことが書かれてましたから」

「あほなことて君」

「ゆうても図書館の話ですからね」

「それがどうしました」

「図書館が収集する資料は文字どおり図書なんです」

「本とか雑誌とかのことですか」

「本や雑誌を集めるのに莫大な資金は必要ありません」

「そらそうですね」

「市内に乱歩の資料が残されているだろうかとかそんなことで悩むのもけつたいな話なんです」

「いったい何を指して資料とゆうていらつしゃつたんでしょうね」

「要するに展示品や陳列物なんです」

「図書館に展示陳列するんですか」

「本を読む習慣もなければ図書館で調べものをしたこともないような人間が図書館関係者として資料を収集したらどうしても展示陳列のレベルでしかものごとを考えられないんです」

「そんなもんですか」

インなどの奇贈を願う。

・推理作家協会にルートを求め各種の情報を得る。

など、館として出来る努力を払おうと、話し合ったものでした。ちょうどこの頃から、ご主人様に乱歩資料の仕事をお願いしたのではなかったでしょうか。また、市長部局の地域振興課の企画で、ミステリー界の大御所を次々と招いての各種の企画が進められたのでした。

其頃私は、柄になく教育委員長という大役を仰せ付けられ、図書館嘱託から引かせていただきましたので、以後の経過はご主人様ご承知の通りであります。最大の顕彰事業である（私はそう思っています）『乱歩文獻データブック』『江戸川乱歩執筆年譜』も出していただき、一躍「名張市立図書館に乱歩顕彰事業あり」と報じられました。ご主人様のご努力に深甚の敬意を表します。

*名張人外境「名張市立乱歩記念館の幻」から転載。

「名張の図書館が乱歩の資料を集めるようになった事情は本誌一五一頁あたりにも出てきますけどとにかく資料収集というのを理解できてる人間がひとりもいなかったわけですね」

「そらまたひどい話ですな」

「ですから○○○先生にけしかけられて乱歩関連資料を集めることになっても何も考えませんでした」

「何を考えたらよかったですか」

「まず何を集めたらええのかですね」

「どんな本や雑誌を集めたらええのかゆうことですか」

「たとえば乱歩の著書を集めるにしても単著だけでええのか共著も含めるのかとかそういうことです」

「それ全然決めてなかったんですか」

「本来であれば収集対象を明確に決めてそれを明文化するべきでした」

「明文化するゆうのは情報として共有するゆうことですね」

「何を集めたらええのかが誰にでもわかるようにしとかなあきませんから」

「できてませんでしたか」

「ゆうても名張市のお役人なんかずんべらぼんのあほぼつかりですから」

「ずんべらぼんのあほゆうことはいないと思いますけど」

「けどお役人ゆうのはひどいもので」

「たしかにあまり評判はよくないみたいですけど」

「もう顔に書いてありますからね」

「なんて書いてありますねん」

「手前どもは何も考えさせていただかないことにさせていただいております」

「と右のほつぺに書いてあります」

「そしたら左のほつぺには」

「手前どもはできるだけ働かさせていただかないようにさせていただいております」

「いやそこそこ働いてくれるように思いますけど」

③

奇譚 江戸川乱歩著 藍峯舎

大衆文化 第14号 立教大学江戸川

乱歩記念大衆文化研究センター

大衆文化 第15号 立教大学江戸川

乱歩記念大衆文化研究センター

明智小五郎事件簿 1 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 2 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 3 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 4 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 5 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 6 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 7 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 8 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 9 江戸川乱歩 著 集英社

明智小五郎事件簿 9 江戸川乱歩 著 集英社

「そんな名張市立図書館も今年で開設五十周年です」

「おめたい節目の年ですね」

「オープンした昭和四十四年から一貫して乱歩関連資料の収集を継続してまいりました」

「資料収集半世紀ですか」

「半世紀ゆうたらないましたもんです」

「乱歩の資料を専門的に収集してる図書館は全国にたったひとつだけでしょうから」

「本来であれば乱歩関連資料の聖地になつてるはずなんですけど」

「やつぱりずんべらぼんですか」

「平成二十八年度にどんな乱歩関連資料を収集したのか名張市立図書館に教えてもらたんなんですけど」

「どんなんでした」

「下段③の二十四点で君これが名張市立図書館の実態なんです」

「ちゃんと収集できてませんのか」

「収集対象が明確にされてないわけですからそのへんは曖昧です」

「ちゃんとできてるのかどうか判断するための基準がないゆうわけですか」

「たとえば新潮文庫の『江戸川乱歩名作選』は収集してるんですけど同じく新潮文庫の『少年探偵団』や『妖怪博士』は収集してないんですね」

「どうしてですか」

「ようわかりませんがやつぱりずんべらぼんやからやないですか」

「なんやもうそればかりですか」

「本誌には平成二十六年から三十一年四月までの乱歩の著書目録が掲載されてますからそれと比較したら名張市立図書館による乱歩の著作の収集がいかんずさんであるかがよくわかります」

「それほどひどいんですか」

「乱歩関連資料を収集して半世紀の図書館がずんべらぼんなんです」

「それはもういいですから」

明智小五郎事件簿 10 江戸川乱歩

著 集英社

明智小五郎事件簿 11 江戸川乱歩

著 集英社

明智小五郎事件簿 12 江戸川乱歩

著 集英社

怪人二十面相 上 江戸川乱歩著

ゴマブックス

怪人二十面相 下 江戸川乱歩著

ゴマブックス

東京少年D団 明智小五郎ノ帰還

江戸川乱歩原作 P H P 研究所

べ切本 左右社編集部編 左右社

江戸川乱歩傑作選 江戸川乱歩著

文藝春秋

乱歩随筆 江戸川乱歩著 青蛙房

怪談入門 江戸川乱歩著 平凡社

江戸川乱歩名作選 江戸川乱歩著

新潮社

江戸川乱歩名作ベストセレクション

江戸川乱歩著 ゴマブックス

*名張人外境ブログ「夏が過ぎ秋になつても名張市は」から転載。

アレクサンドリアは永遠に

「そもそも名張市立図書館は何を目的に乱歩関連資料を収集しているのか」

「収集の目的はどういうことなのか」

「それがはっきりしてないんです」

「収集の対象も曖昧なら目的もはっきりしてないゆう状況ですか」

「僕が名張市立図書館の乱歩資料担当囑託を拝命したのは平成七年十月のことでしたけど」

「もう二十四年も前ですか」

「乱歩に関して何ひとつ明確に決められてることはありませんでした」

「そら困ったことです」

「ですから教育長の〇〇〇先生に文書を提出いたしましたして」

「君そういうの好きですね」

「乱歩関連資料の収集に関して名張市教育委員会の基本的なお考えをお聞かせくださいとお願いました」

「どんなお考えでした」

「それがなかなかご回答をいただけません」

「教育長さんやっぱりご多忙ですか」

「〇ちゃんだけに遅くなつてごめんねみたいな話かと思ってきましたところ」

「そんな昭和四十年代のヒット曲を知ってる人間はいまや絶滅危惧種です」

「結局お答えはいただけずじまいでした」

「君みたいな人間はもとに相手してもらえないことが多いでしょうね」

「その点いまは便利になりました」

「何がどうなりました」

「インターネットが普及しました」

「たしかにネットの登場で情報伝達は簡単便利になりました」

「名張市のホームページに市長への手紙というページがあるんですけど」

「一般市民がそのページを利用して市長さんに意見を述べたり疑問点を質問したりできるわけですか」

「でも大きな問題があるんです」

「なんですけどね」

「目をむく息を呑む言葉を失う」

「どないしました」

「何をお聞きしてもとにかくお答えが無茶苦茶なんです」

「無茶苦茶ではあきませんがな」

「ある日その市長への手紙のページを利用しまして」

「何かお聞きしたんですか」

「名張市立図書館が乱歩関連資料を集める目的は何か」

「どんなお答えでした」

「日本における探偵推理小説の礎を築いた名張生まれの作家江戸川乱歩を顕彰し収集した資料により市民のみなさんに江戸川乱歩についての知識や興味関心を高めていただくためですゆううな無茶苦茶なお答えで」

「それ別に無茶苦茶なことないと思いますけど」

「ふたことめには乱歩顕彰乱歩顕彰と口にする人がいるんですけど」

「悪いことやないと思いますけど」

「けど顕彰とは隠れた善行や功績などを広く知らせることであるとそこらの辞書に書いてありますから」

「乱歩はすでに広く知られてます」

「むしろ名張のほうがはるかに知られてないんです」

「それやつたら乱歩顕彰ゆう表現はちよつとおかしいかもしれません」

「おかしなことはまだあります」

「どこがおかしいんですか」

「名張市民がなんで乱歩に関する知識興味関心を高めなあかんのか」

「知識とか興味関心とかはゆうたら個人の問題ですからね」

「そんなものをお役所が市民に押しつけてどないする」

「人からものを押しつけられるのはたしかに気イのええもんやないです」

「この世で押しつけられて嬉しいのは豊満なおっぱいだけですからね」

「なんでそっちへ行くんですか」

「それにそもそも乱歩関連資料の収集は名張市民から要望された事業ではないんです」

「○○○○先生の鶴の一声ですか」

「かりに鶴の一声がきつかけであつてもまともな資料収集ができてたらまだええんですけど」

「全然なつてないと」

「乱歩関連資料を必要としている市民なんかひとりも存在しませんし」

「市民が乱歩作品を読むにしても昔の本よりは新しい読みやすい本のほうがいいですからね」

「半世紀にわたる乱歩関連資料の収集は結局まったく無駄やったわけです」

「それはまずいと思いますけど」

「ですからもうやめたらええんです」

「乱歩関連資料の収集ですか」

「平成十五年十月二十二日のことですよ」

「また昔の話ですか」

「名張市鍛冶町にある乱歩ゆかりの料亭清風亭で江戸川乱歩著書目録発刊慰労会を開催していただいたんです」

「名張の図書館が出した目録ですね」

「僕が図書館の嘱託になつた経緯は本誌一五六頁あたりに出てますけど」

「館長さんから乱歩作品読書会の講師を頼まれたのがきつかけやそうで」

「お役人の思いつく乱歩関連事業ゆうのはその程度のことなんですけど」

「それではお茶を濁してるだけやと」「やみくもに乱歩関連資料を買いまくつて並べるだけでもあきません」

「並べるだけであかんのやつたら何をしたらよかつたんですか」

「図書館法ゆうのがあります」

「図書館を運営するうえで指針になる法律ですね」

「条文の一部は抜粋して下段の④に掲載してあります」

「ぎょうはそのパターン多いですね」

「第二条には図書館は資料を収集し整理し保存してうんぬんゆうて明記されてます」

「一番はまず収集です」

「そもそも図書館の役割ゆうのは古代アレクサンドリア図書館の昔からちゃんと決まってるんです」

「やっぱり収集と整理と保存ですか」

「名張の図書館も乱歩関連資料をわけもわからんまま古本屋さんから購入することまではできたんですけど」

「その次の整理をようせんかつたゆうことですか」

「整理ゆうたかて本棚にばたばた本を並べるだけではだめですからね」

「ほな何をしますねん」

「体系化です」

「なんや難しそうですけど」

「いや図書館法第三条にも資料の分類排列と目録整備について書かれてるようちにごく普通のことです」

「図書館が当然なすべきことですか」

「どんな資料を所蔵してるか一般公衆に示すことが要求されますから」

「目録を整備せなあかんわけですな」

「ところが名張の図書館は乱歩関連資料の目録を整備してませんでした」

「なんでですな」

「図書館関係者は資料収集のことなんかなんにも知りませんから」

「そんなことでは図書館と呼べへんのと違いますか」

「ですから僕が乱歩資料担当囑託を拝命して目録整備を進めたんです」

「図書館から依頼されたわけですか」

「目録をつくるのかそんな発想は図書館関係者には皆無ですから一から十まで僕の一存です」

「なんやもう無茶苦茶ですな」

④

第二条 この法律において「図書館」とは、図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、

(以下略)

第三条 図書館は、図書館奉仕のため、土地の事情及び一般公衆の希望にそい、更に学校教育を援助し得るよう

に留意し、おおむね左の各号に掲げる事項の実施に努めなければならない。

一 郷土資料、地方行政資料、美術品、レコード、フィルムの収集にも十分留意して、図書、記録、視覚聴覚教育の資料その他必要な資料(以下「図書館資料」という。)を収集し、一般公衆の利用に供すること。

二 図書館資料の分類排列を適切にし、及びその目録を整備すること。

(以下略)

「平成十四年のお正月に〇〇〇〇先生がおつしやつたこともですね」

「新春インタビューですか」

「名張市立図書館は平成六年から慶應義塾大学推理小説同好会OB会有志のみなさんからミステリー関連の蔵書をご寄贈いただいてまして」

「OB会のみなさんは将来自分たちの蔵書を全部名張へ寄付すると思統一していただいていたそうですけど」

「いくら図書を寄贈していただいても整理とか体系化とか全然ようしませんから図書館の地下書庫にしまい込んでくだけやつたんです」

「死蔵してただけですか」

「いかにもそのとおりなんですけどだからといって誰かを責めることはできません」

「なんでですねん」

「ゆうてもずんべらぼんですから」

「どうゆうことですねん」

「昭和二十九年三月三十一日に名張町と滝川村箕曲村国津村が合併して名張市が誕生したんですけど」

「誕生以来今年で六十五年です」

「晴れて前期高齢者の仲間入りです」

「なんで人間にたとえますねん」

「この六十五年というもの毎年毎年」

「何がありました」

「来る年も来る年もただひたすら」

「何をしてたんですか」

「名張市はずんべらぼんばかり職員として採用してきたわけです」

「君しまいに怒られますよ」

「げんに名張市のお役人は市民から役所のあほと呼ばれますから」

「それは心ない市民の話ですか」

「けどそんな名張市民も名張から一歩外に出たとたん」

「どないなります」

「名張のあほと呼ばれます」

「いったいなんの話ですか」

「ですから慶應OBのみなさんのご厚意でつづいていた図書寄贈も平成二十三年でおしまいになりました」

「とうとう慶應OBのみなさんから愛想つかされましたか」

「いやその逆なんです」

「といたしますと」

「名張の図書館から慶應OBのみなさんにもう寄贈していきませんわと」

「そんなこと申し出たんですか」

「いくら寄贈してもろても死蔵するだけやし場所ふさぎですから」

「なんとも失礼な話やないですか」

「いや図書館側には失礼であるという認識なんかなかったと思いますよ」

「なんでですねん」

「お役所のみなさんは自分らの都合しか考えませんから」

「けど公務員ゆうのは全体の奉仕者ですから自分らの都合だけ考えとつてはあかんのと違いますか」

「しかしあの人たちは公務員である以前にまずずんべらぼんですから」

「そしたら〇〇さんが新春インタビューでおっしゃってた名張市にミステリーの拠点をつくるゆう話は」

「名張の図書館にミステリー関係の本を寄贈したらミステリーの拠点ができるとかそんな完全な妄想です」

「妄想て君」

「〇〇先生も市職員のおつむのレベルを考えて発言なさるべきでした」

「名張市職員のみなさんにはミステリーの拠点づくりは無理でしたか」

「ミステリーの拠点づくりのみならず頭つかわんならんあらゆることがあくまでも絶対に死んでも無理なんです」

「何もそこまで強調せんでも」

「それで平成十五年十月二十二日のことですけど」

「てゆうかままず平成十四年の結末を教えてくださいませんか」

「何かあったんですか」

「君はおぼえてないんですか」

「いろいろなことがありましたから」

「〇〇さんの新春インタビューがうそやったかどうか」

「それでしたら平成十四年二月十三日のことですけど」

「どうなりました」

「下段の⑤にありますとおり教育長から市長発言は事実ではないというお答えを頂戴いたしました」

「市長発言は虚偽であったと」

「名張市教育委員会には平井隆太郎先生と交渉を進められるような知識も能力も見識もなんにもないですからね」

「それで事実ではなかったとわかつて君はどうしたんですか」

「平成十四年ゆうのは名張市にとって大変な年やったんです」

「君のゆうこと聞いてたら名張市は毎年大変だらけみたいな感じですけど」

⑤

といった次第で昨13日午前、名張市役所教育長室で行われた教育長、教育委員長、教育次長、図書館長と私の話し合いの場で、名張市長の発言が虚偽であったことが判明しました。具体的に申し上げますと、1月1日付「伊和新聞」に掲載された市長インタビューに、私は蔵だけ頂こうと、ひそかに平井先生（平井隆太郎・立教大名誉教授Ⅱ江戸川乱歩の長男）と市教委を通して連絡を取っていました。

という市長の発言があったのですが、教育委員会が市長の命を受けて平井先生に対し土蔵の譲渡に関する働きかけを行った事実はありませんでした。教育長にその旨、明言していただきました。

*名張人外境「人外境主人伝言録（平成十四年二月十四日付）」から転載。

「この年四月には任期満了にともなう名張市長選挙が実施されました」

「そうゆう年でしたか」

「四期目をめざす現職に新人ふたりが挑む熾烈な選挙戦でした」

「現職はもちろん○○さんで」

「対する新人は三重県議会議員から転じた無所属の○○○○先生と日本共産党の○○○○先生」

「○○さんが○○さんを破って見事当選を果たされましたね」

「ざつと○○候補二万四千票に○○候補一万六千票に○○候補二千票で○○先生が第四代名張市長として役所のあ

ほの頂点にお立ちになりました」

「なんやひつかかる表現ですけど」

「そんな大事な選挙を目前に控えた微妙な時期でしたから市長インタビューの件も暫時不問に付しましたところ」

「新しい市長さんが誕生したのでそのままになってしもたゆうわけですか」

「平成十三年から十四年にかけて僕は何を大騒ぎしていたのでしょうか」

「知りませんがなそんなこと」

「それで平成十五年十月二十二日」

「それは何があった日でした」

「清風亭で江戸川乱歩著書目録発刊慰労会が開かれました」

「図書館のつくった目録ですね」

「図書館が乱歩関連資料を収集し一般公衆がその資料を活用するための基本になる目録が三冊揃いました」

「ようやく図書館法にのつとつた図書館になったわけですね」

「慰労会は図書館長の肝煎りで図書館関係者にご臨席をたまわりました」

「ありがたいことです」

「その席上で僕はいいました」

「なんといいました」

「名張市立図書館の乱歩関連資料収集はこれで打ち止めにしませんか」

「それまたどうゆうことですねん」

「収集資料にもつづいた目録は完成しましたし乱歩邸は立教大学が面倒見てくれることになりましたし」

「あとは立教大学が乱歩関連資料の収集をやってくれますからと」

「いや大学と図書館では守備範囲が違いますからそんなことは全然ないんですけど図書館関係者にはそこの理屈すら理解できませんから打ち止めにする口実にはなると思いました」

「それでどうなりました」

「その席で結論が欲しかったんですけど教育長の○○○○先生がまたみんなで集まって話し合いましたよにゆうことととりあえず解散になりました」

「次はいつ集まったんですか」

「それがいまだに召集がないんです」

「いまだにて君」

「お役人でそんなその場しのぎばっかりかましてるわけなんですな」

「なんなんですかそれはいつたい」

名張市制六十周年の大予言

「平成二十六年三月二十二日のことでした」

「五年前ですね」

「松崎町のアドバンスコープADDSホールで名張市制施行六十周年記念式典が催されました」

「節目の年のおめでたい式典です」

「ところがおめでたいことばかりもゆうてられませんでした」

「なんでですか」

「財政難ですからね」

「たしかに名張市は深刻な財政難で」「記念式典のご挨拶でその方面のご心配をいただいた先生もありました」

「どちらの先生ですか」

「代議士の○○○先生」

「やっぱり○○○先生にも心配していたいでましたか」

「○○○先生はおっしゃいました」

「なんとおっしゃいました」

「伊賀市も津市も合併しましたけどあなたगत名張市はしませんでしたね」

「名張市は平成十六年の市町村合併に加わりませんでした」

「ですから名張市はこの先いずれ立ち行かなくなりですよ」

「そらえらいことですがな」

「あなたがたは道を誤ったんですからこの次は正しい判断をしなさいねと」

「もひとつ意味がわかりませんけど」

「要するに○○○先生はかなりお腹立ちやっただけです」

「名張市が伊賀市の合併に加わらなかつたからですか」

「ゆうても国の方針でしたから」

「せっかく国がお膳立てをしてやっただけに名張市はなんなんだと」

「名張市は合併のご褒美である合併特例債もいただけませんでしたし」

「市の財政はいよいよ厳しくなりまして」

「これはほんとに○○○先生のご人徳なんですけど」

「なんでご人徳の話になりますねん」

「僕みたいな一般市民がそんな挨拶したらどうなると思います」

「市制六十周年の記念式典ですか」

「市民がたくさん集まって喜んでるとこへ乗り込んで名張市はもう立ち行かへんのじゃ名張市民がうつすいさかいじゃこのあほんだから」

「そんながらの悪い挨拶してどないしますねん」

「住民投票とかしやらくさい真似かましやがってこのあほんだから」

「名張市は住民投票で合併に賛成か反対か民意を問いました」

「平成十五年二月九日に投票がありまして反対はざつと二万六千票で賛成は一万一千票」

「民意はノーと出たんですけど○○○先生はそれがお気に召さないと」

「民意はノーと出たんですけど○○○先生はそれがお気に召さないと」

「民意はノーと出たんですけど○○○先生はそれがお気に召さないと」

「住民投票とかしたら合併反対ゆう答え出るの是最初から目に見えたあるやないかこのあほんだらが」

「そもそも旧上野市と名張市は昔から仲が悪かったわけですすね」

「名張は合併しまへんにやとか勝手なこと抜かしたあげくがこのざまじや国の方針に逆ろたらどないなことになるかようわかったかこのあほんだらが」

「ようそこまでいえるもんですな」

「僕は人徳がないですからこんな挨拶したらただでは帰してもらえません」

「君が挨拶を頼まれる心配はまったくないと思いますけど」

「つまり名張市は五年も前に〇〇〇〇先生からお先真つ暗であると太鼓判を頂戴してたわけです」

「それから五年が過ぎましたけど」

「〇〇先生の太予言が大当たりいたしました」

「財政難はより深刻になりました」

「まさしく立ち行かなくなつて固定資産税の独自課税を導入しました」

「都市振興税という独自の税金として

平成二十八年四月から五年間だけ資産税率を引き上げるゆう話でしたな」

「それで平成二十九年八月に名張市の経常収支比率が発表されました」

「経常収支比率と申しますと」

「名張市に年間いくらの収入があつてそのうちどうしても出て行つてしまう支出がどれくらい占めてるのか」

「どうしても出て行つてしまう支出といひますと」

「たとえば人件費とか扶助費とか削減することが困難な支出ですな」

「ゆうたら固定費ですか」

「その経常収支比率が名張市は平成二十八年度に九九・七%でした」

「固定費がほぼ百パーですか」

「三重県内二十九市町のトップです」

「そんなトップあきませんがな」

「月に千円の収入があるとしたらそのうち九百九十七円が家賃とか食費とかで出て行つてしまふわけです」

「自由につかえるお金はわずかに三円ですか」

「わずか三円では子供に飴玉も買うてやれません」

「三円ゆうのはたとえですから」

「名張市が千円もつてるとしたらそのうち主体的にみずからの判断でつかえるお金が三円しかないわけです」

「さうゆうことにはなりますけど」

「時代の趨勢ではありますけどね」

「どこもかしこも財政難ですから」

「てゆうか地方から主体性を剥奪して強力な中央集権国家を実現したいゆうのが〇〇〇〇先生の悲願ですから」

「さうなんですか」

「名張市は財政難を推進力に時代の趨勢の最先端を突つ走つてるわけです」

「あんまり走りたないんですけど」

「でもそうゆう自治体が増えてきてるのはたしかです」

「そうでしょうね」

「去年十月には京都府の宮津市と千葉県銚子市がこのままやったら三年後には財政再生団体に転落しますという見通しをあいっついで発表しましたし」

「財政再生団体ゆうたら北海道の夕張市とおんなじですな」

「名張市も都市振興税を導入して首の皮一枚で生き残りましたけど」

「もう崖っぷちですか」

「名張市立図書館による乱歩関連資料の収集もそうなんです」

「やっぱり予算不足ですか」

「ゆうても年間予算ゼロ円ですから」

「ゼロ円では何もできませんがな」

「名張市立図書館は乱歩関連資料の収集事業を実施していますとはとてもいえない状態なんですね」

「事業費ゼロ円ではね」

「けど財政難ゆうのはお役人にとってありがたいことなんです」

「なんでですねん」

「お金ありませんからなんにもできませんゆうていいわけできませんから」

「たしかに予算がなかったらどんな事業もできません」

「せやから名張市立図書館もなんにもせんでも全然OKです」

「けど平成二十八年度には乱歩関連資料二十四点集めたゆう話でしたけど」

「あれは一般の図書として購入した本なんです」

「そらまあ乱歩資料の予算がゼロやつたらそうなるでしょうね」

「しかも収集したとはいえませんが」

「ほな何をしたんですか」

「たまたま入ってきた本が乱歩に関係あるもんやつたから乱歩のタグつけときましたゆうだけの話なんです」

「えらい出たとこまかせですな」

「それで僕はまた名張市ホームページの市長への手紙を利用して」

「今度は何をお聞きしたんですか」

「たとえば乱歩原作の漫画は乱歩関連資料ではないのかと」

「漫画になった乱歩作品ゆうのはたくさんありそうです」

「平成二十八年度には乱歩原作の『孤島の鬼』とか出ましたからね」

「けどあの二十四点のなかに漫画は入ってませんでした」

「しばらくしてご回答のメールを頂戴したんですけど」

「どんなお答えで」

「漫画も収集対象ですけどお金がないから買ってません」

「財政難でとても漫画までは手が回らないと」

「けどそんな例によってその場しのぎの大うそですからね」

「なんでわかりますねん」

「そもそも収集対象が明確にされてないわけですから」

「漫画が対象かどうかははっきりしてないということですか」

「ただし僕の知るかぎり名張市立図書館は乱歩原作漫画を一冊も収集してませんでした」

「そしたら対象やないんですね」

「漫画はまともな資料やないという漠然たる認識があったのかしれません」

「たしかに図書館ではあまり漫画にお目にかかりません」

「けど乱歩関連資料を収集する場合は漫画も対象とするべきなんです」

「げんに漫画は収集対象ですとご回答をいただいておりますからなんともややこしい話です」

「なにしろお役人ですから二重三重にどんなうそをついてでもその場しのぎに走るわけです」

「その場しのぎばっかりですがな」

「名張市だけやのうて中央省庁のお役人かて大うそをかましますからね」

「文書捏造とか統計不正とかしょっちゅうニュースでやってますけど」

「中央でも地方でも平気で人をだませるようになって初めて一人前のお役人なんです」

「やっぱり初心者の方は平気でしょうつけませんか」

「うそをつくときはどうしても態度に出ますから」

「いま自分はそのをついているという良心の呵責があるからでしょうね」

「口ごもったり赤面したり目を泳がせたり」

「ありがちですね」

「思わず放屁したりね」

「それはないと思いますけど」

「いつまでも慣れてくれないと名張市役所じゅうあつちこち放屁の音だらけでやかましてしゃあない」

「せやから放屁はないゆうてるのに」

「とにかく何も決めてないのに漫画は収集対象ですとうそをついたり財政難で収集できませんとうそをついたり」

「財政難はほんまですがな」

「けど乱歩原作の漫画なんか一冊数百円ですし平成二十八年度には六冊しか出版されてませんから」

「六冊も出てるんですか」

「金額的には微々たるものですけど財政難を免罪符にしてですね」

「お金ないから買えませんと」

「そろそろそう来るころやろと思てました」

「名張市ホームページの市長への手紙を利用しました」

「もう病みつきですな」

「昨年四月六日のことでしたけど」

「どんな手紙でした」

「名張市立図書館が漫画も乱歩関連資料やと認めていながらも収集してないのは市長はんやつぱり問題でおまつせと切々と訴えまして」

「全然切々としてない感じですけど」

「そのあと下段の⑥のとおりお願いいたしました」

「財政難やから乱歩関連資料の現物は買えないとしてもその資料のデータは収集して記録しておきなさいと」

「四月十三日にメールでお答えを頂戴しました」

「どんなお答えでした」

「目をむく息を呑む言葉を失う」

「またそれですか」

「あまりにもひどい内容なので本誌一八一頁に大きく転載しておきました」

「いちいちそのページ探さなあきませんがな」

「資料の購入にかかる経費は必要としないもの日々の出版情報のなかから乱歩関係資料となる書誌データを収集しそれを記録するためにはそれなりの時間と労力を継続してかけていく必要がありますみたいな」

「たしかにそう書いてありますね」

「したがいまして市立図書館の運営形態の現状のなかでそういったことがでさるかどうかについて見極めてまいりたいと考えていますみたいな」

「それ要するに現在の名張市立図書館には乱歩関連資料を収集する能力がありませんゆうて自分から暴露してるようなもんやないですか」

「手前どもは何も考えさせていたただかないことにはさせていたただいておりますと堂々と公言してるわけです」

「ほんまに手前どもはできるだけ働かさせていただかないようにさせていただいておりますゆう感じですね」

【⑥】

そこでお聞きいたしますが、名張市立図書館が、資料のデータは収集するが、資料は購入しない、という資料収集を進めることはできないものでしょうか。

たとえば先月、乱歩原作の漫画『怪人二十面相 上巻』がワニブックスから出版されました。

名張市立図書館は、これを収集すべき乱歩関連資料であると認識しながら予算の制約から収集してないものと推測されますが、書誌データを記録するだけでも資料収集にはなるものと愚考いたします。

同書の書誌データは当方のブログでこのように記録しております。

<http://nabariningaiyo.blog.shino.jp/Entry/5165/>

これは同書を購入して確認したデータですが、わざわざ購入しなくても、たとえば国立国会図書館のオンラインサービス「NDL ONLINE」で

「てゆうかこれはもう手前ども三重県名張市は打つて一丸となつてあほなんですとわざわざ市長名義で全国に発信してるようなものなんです」

「全国ゆうたらオーバーですけど」

「僕は自分のブログで一連の質問と回答を公開しますから」

「それやったら全国発信ゆうことにはなりませんけど」

「千葉県のほうから名張市のお役所仕事はほんまもんのお役所仕事で見事なもんですなあ感服しますわほんまにゆうて手紙をくれた人もあります」

「そらまたえらい不名誉なことだ」

「名張市立図書館が手前どもにはまともにお仕事をする気はさらさらございませんと宣言してるわけですから」

「図書館関係者のやる気ゆうもんがまつたく感じられませんね」

「だいたい市長も市長なんです」

「○○さんがどないしました」

「職員がここまであほな回答をあげたら叱り飛ばしたらなあきません」

「つかさつかさの職員から回答があがつてくるわけですね」

「回答をあげてきた図書館関係者を名張市役所二階の市長室に呼び出してですよ」

「何をしますねん」

「○○ないしは○○はわしの顔に泥を塗るつもりかこのあんけらそがゆうてぼこぼこにしたるべきなんです」

「ないしはゆうのはなんですねん」

「あの回答を書きいただいたのが前館長の○○○○先生か現館長の○○○○先生かようわかりませんので」

「それで前職ないしは現職ですか」

「市長室にふたり並べてぼこぼこにしたつたらええんです」

「ええことありますかいな」

「なんのための空手有段者ですか」

「知りませんがな」

も次のとおり書誌データが公開されております。

<https://ndonline.ndl.go.jp/#/detail/R300000001-1028819844-00>

つまり、財政難のせいで購入はできなくても、書誌データを収集することは可能ですから、それを記録しておくことが、乱歩関連資料の収集をつづけている公共図書館の最低限の責務ではないか、と判断される次第です。

つきましては、乱歩関連資料のうち漫画、視聴覚資料、定期購読していない雑誌に関して、購入はせずに書誌データだけを収集して記録してゆくことが名張市立図書館に可能かどうか、お知らせいただきたいと思えます。

一円のお金もかからないのですからいくらでも可能なはずですが、もしも不可能なのであれば、その理由をご説明ください。

よろしくお願ひ申しあげます。

*名張人外境ブログ「大連投無事終了」から転載。

伊賀市と連携どうでしょう

「三重県立図書館ゆうのがありますけど」

「津市にありますね」

「あそこが毎月「みえの本」という冊子を発行してます」

「どんな冊子ですか」

「三重県関係出版物の速報です」

「一か月のあいだに出た三重県に關係ある本の情報ですか」

「それがリストになつてずらつと掲載されてるわけです」

「県立図書館に行つたらそのリストに載つてる本が読めるわけですね」

「必ずしもそうではありません」

「といいますと」

「新聞なんかから三重県関係の本とか雑誌記事の情報を探してきてその書名や著者名をはじめとした書誌データをリスト化してるわけです」

「新刊情報のリストですか」

「図書館運営のはじめの第一歩はそれなんです」

「まず本に関する情報を収集するわけですか」

「古代アレクサンドリア図書館の昔から図書館にとつてのいわゆる一丁目一番地は資料を収集することでした」

「図書館法にも資料を収集し整理し保存しゆうてまず収集という言葉が出てきました」

「そのためにはまず本に関する情報を収集することが要求されます」

「どんな本が出ているのかを知らないことには必要な本を収集することもできません」

「ところが名張市立図書館は日々の出版情報のなから乱歩関係資料となる書誌データを収集しそれを記録するために必要な時間の時間と労力を継続してかけていく必要がありますとかあほなことゆうてるんです」

【7】

今年江戸川乱歩の没後二十年にあたる。せんだつて三重県名張市の教育長と図書館長が上京して、新築計画中の図書館に江戸川乱歩記念室を整備したいという意向を洩らされた。

四日市市立図書館の丹羽文雄記念室や、彦根市立図書館の舟橋聖一記念文庫がお手本らしいが、(以下略)

* 「婦人公論」臨時増刊(昭和六十年十一月)から転載。

【8】

(略)

なお、先日PDFファイルでご高覧をたまわりました当方のインタビュー「カリスマ囁託の驕慢と頽落」が収録された小学館の電子書籍『江戸川乱歩電子全集16 随筆・評論第1集』(<http://www.shogakukan.co.jp/books/09d04207>)はあす27日に配信が開始されますので、僭越ながらお知らせ申し上げます。

同インタビューでも名張市立図書館

「三重県立図書館は日々の出版情報のなかから三重県関係資料の書誌データを収集してそれを記録することをちゃんとこなしてますけど」

「それが普通の図書館なんです」

「そしたら名張市立図書館は普通やないんですか」

「ほんまもんのずんべらぼんです」

「そんな図書館あるんですか」

「開館以来五十年を経過していまやずんべらぼんは名張市立図書館の輝かしい伝統として確立されています」

「なんとも難儀な伝統ですけど」

「最初に考えるべきことを考えて決めるべきことを決めておいたら普通の図書館として乱歩関連資料を普通に収集できてたんですけど」

「実際には考えることも決めることもせず資料収集というものを展示陳列のレベルでしかとらえていなかったということですけど」

「残念ながらここらあたりには昔もいまも官民双方その程度のレベルの人間しかいませんから」

「やつぱり土地柄ですか」

「その土地柄が例の昨年四月十三日付の回答でばれてしまいました」

「名張市立図書館は図書館の一丁目一番地である資料収集ができない図書館である」と

「それはもう元館長のお経は読んでも乱歩は読まぬでおなじみやつた○○○
○先生が中心になって図書館の開設準備をお進めいただいていた時代からそうやつたんですけど」

「それどんなおなじみですねん」

「慶應義塾大学推理小説同好会OB会の件におきまして」

「例の寄贈図書の問題ね」

「寄贈がスタートした当時の館長はあーいあいッ」

「なんですねん」

による乱歩関連資料の収集が有名無実なものであることは指摘しておきました。8月16日に送信した「市長への手紙」の同月24日付ご回答で公示いただいた平成28年度の収集実績もそれを裏づけるものでしたので、過日、それを補足したリストを名張市役所秘書広報室にお届けいたしました。

ご一覽いただいたものと存じますが、あのリストとともに提出した文書にも記しましたとおり、名張市立図書館には一般的な公立図書館として乱歩関連資料を収集する能力はともありません。

とはいえ、名張市立図書館がやみくもに買い集めて所蔵している乱歩関連資料がわが国でただひとつの貴重なコレクションであることは論をまたず、また乱歩関連資料の収集と管理、活用は公立図書館などの公的機関によって継続されるべき事業であることも論をまちません。

そこで、今後は伊賀市と名張市が連携してその事業を進めるべきではない

「あーいいいッ」

「急にどうしたんですか」

「おつさあるさあんだよーんゆうてき

のうまで市立幼稚園の園長さんをお務

めやった〇〇〇〇〇〇先生でしたから」

「いちいち童謡歌わな元館長さんのお

名前が出てきませんか」

「ゆうたらあれですけど本のこと何ひ

とつご存じない先生でしたから」

「畑違いやったら仕方ないですね」

「寄贈図書を活用することなんかそも

そも無理な話やりましたか」

「そしたら最初から寄贈を断つたらよ

かったんやないですか」

「もちろんそうなんですけどそうは問

屋が卸しません」

「なんでですねん」

「そもそも慶應のOB会と名張の図書

館との仲を取り持っていたいただいたのが

とてもお偉い先生でした」

「どなたでした」

「OB会のメンバーでいらつしやった

代議士の〇〇〇〇先生です」

「そらお断りできませんわ」

「わが国における大学のミステリー愛

好会とか研究会とかの草分けとも呼ぶ

べき慶應義塾大学推理小説同好会OB

会からお声をかけていただきながら」

「寄贈図書を活用してミステリーの拠

点づくりを進めるとか最初から無理や

つたんですね」

「本を読むとか資料を集めるとか図書

館を運営するとかそこらへんのことに

関してかけらほどの知識も関心もない

人間が〇〇〇のおツ」

「どうしました」

「〇〇〇はんですねえッゆうて図書館

長やってるのが名張市なんです」

「いったいどの〇〇〇〇はんですねん」

「それで名張の図書館はもうあかんな

と見切りをつけまして」

「どないしますねん」

かと愚行する次第です。

伊賀市の庁舎移転後、同市の図書館がどういう体制になるのかはいまのところ不明ですが、両市の図書館が力を合わせて、名張市立図書館の轍を踏まぬよう、あらかじめ考えておくべきことを考え、決めておくべきことを決めたいので乱歩関連資料の収集をつづけるのが望ましいと思われまます。

なお、市立図書館乱歩資料担当囑託を拜命していた当時から現在まで、こうした提案を具申しても市職員のみなさんからはいつさい反応がなく、小さい先送りや鉄面皮なその場しのぎで逃げを打たれて煮え湯を飲まされることをいやというほど経験してきた方としては、この問題は図書館長や教育長ではなく、ぜひとも貴職にご判断いただきたく、それも必ず今任期中に結論をお出しいただきたいと念じている次第ですが、ご判断はまたあらためてお願いすることにして、8月24日付ご回答に関して以下に二点、お尋ね申し上げます。

「伊賀市と連携してはどうかいなと」

「そうゆうたら〇〇〇〇先生も〇〇〇〇先生も伊賀市のご出身です」

「けどあらかじめゆうときますと伊賀市も官民双方ずんべらぼんです」

「君は伊賀地域のすべての人間を敵に回す気ですか」

「五年前に出た「伊賀一筆」創刊兼終刊号の漫才でもやりましたけど」

「なんぞ伊賀市のことを話題にしませんでしたか」

「あれだけばしょーさんがーばしょーさんがーゆうて騒ぎ立ててるくせに」

「伊賀市のみなさんは親しみを込めて芭蕉のことを芭蕉さんと呼びます」

「芭蕉は津軽海峡を渡って北海道へ行きたがったとか気の触れたようなことと本気で口走りますからね伊賀市は」

「さつぽろ雪まつりに芭蕉の雪像を設置する予算案が提出されて伊賀市議会がそれを認めなかった件ですね」

「あの一件だけでばしょーさんがーで

おなじみの伊賀市が名張市と同じく官民双方議会も含めて徹頭徹尾ずんべら

ぼんであることが明白になりました」

「ほな連携してもあきませんがな」

「ただしスペースがあります」

「なんのスペースですか」

「収集資料を保管する場所です」

「名張の図書館には乱歩コーナーがありますがあ

「あそこはすでに満杯で本がコーナーからオーバーフローしてるんです」

「あのコーナーは図書館が丸之内から桜ヶ丘に新築移転したとき新設されたものでしたな」

「中島河太郎先生の「乱歩の生地」という随筆によりますと二〇〇頁の⑦みたいなことなんですけど」

「昭和六十年に教育長と図書館長が名張から中島先生のとこへ相談にあがってたわけですか」

〔以下略〕

*名張人外境ブログ「つつがなく配信されたようです」から転載。

〔9〕

中 相作 様

この度は、市長への手紙をお寄せいただきありがとうございます。お尋ねのありましたことについて、以下のとおり回答させていただきます。

(1) 乱歩関連資料の収集に関して、名張市から伊賀市に連携の働きかけを進めていただけるかどうか。進めていただけない場合は、名張市立図書館による資料収集の具体的な見通しをお示しいただきたいと思えます。

乱歩関連資料（江戸川乱歩の著作物及び江戸川乱歩に関する著作物）の収集については、引き続き市立図書館の業務として取り組んで参りたいと考えており、このことについて伊賀市との連携の予定はありません。

〔略〕

平成29年12月8日

名張市長 〇〇〇〇

「お役人にはなんの考えもありませんから人に頼るわけです」

「多少の考えはあると思いますけど」

「なんの考えもないから丹羽文雄記念室とか舟橋聖一記念文庫とかよその図書館の真似に走るわけです」

「乱歩コーナーは真似でしたか」

「しかし丹羽文雄とか舟橋聖一とかすでに忘れられた作家ですからね」

「たしかにいまやあんまりなじみのない名前です」

「名張市立図書館の新築移転は昭和六十二年のことでした」

「乱歩コーナーがオープンした年でもあります」

「その昭和六十二年に乱歩の著書は四十五点も出版されてるんです」

「そんなことなんでわかりますね」

「名張市立図書館が発行した乱歩の著書目録を調べたら一発でわかります」

「それにしてもたくさん出てますね」

「ところがそれがわからんわけです」

「何がわかりませんねん」

「本誌一五三頁にも出てきますけど乱歩の本が出つづけてるわけですから将来を見越してそれなりのスペースを確保することが必要でした」

「それがちまちました展示や陳列のコーナーになつてしまつたと」

「一年に一冊の本も出ない作家の記念室とか記念文庫とか猿真似してどないするゆうんですか」

「それで伊賀市のどこにスペースがあるんですか」

「伊賀市の新庁舎が完成しまして」

「今年の一月に新しい庁舎で業務が開始されましたね」

「お城にほど近い旧庁舎は空き家になつてしまいました」

「えらい揉めてるみたいですけど」

「伊賀名物の蝸牛角上の争いです」

「市長さんと市議会のバトルですね」

*名張人外境ブログ「名張市長、伊賀市との連携を否定」から転載。

【10】

12月4日付「市長への手紙」に対する12月8日付ご回答、たしかに落掌いたしました。ご多用中、迅速なご手配をたまり、お礼を申しあげます。しかしながら、まことに僭越なことを申しあげますが、もう少し真面目にお答えいただけないものでしょうか。名張市立図書館による乱歩関連資料の収集は、とにかくでたらめで目も当てられない惨状を呈しています。ですから私は、せめて伊賀市と連携してはいかがでしょうかと提案している次第です。それをいうにことかいて、「引き続き市立図書館の業務として取り組んで参りたいと考えており」とはどういうことでしょうか。いまの状態がひきつづくようでは困ると考え、その旨を訴え、現実的な打開策を提示して、どうかご一考いただけませんか、と切々とお願いしている市民に対して、愚弄するようなご回答はお慎みいただきたいと思

「空き家になった旧庁舎は図書館にするゆーのが伊賀市のプランやったんですけど」

「市議会側には旧庁舎は解体せよといふ声が多いみたいですね」

「でも旧庁舎にはとにかくスペースがありますから」

「そのスペースをどうするんですか」

「名張の図書館が収集した乱歩関連資料を伊賀市に譲渡してそのスペースで保管してもらって後事を託すわけです」

「名張の図書館はどうしますねん」

「当初の構想どおり乱歩先生のお机でございませうございませうおオーバークートでございませうて展示陳列だけやってたらええんです」

「伊賀市はちゃんとしてくれますか」

「それが伊賀市もあほぼつかりで図書館における資料収集のなんたるかを心得た人間はひとりもないんです」

「それではあきませんがな」

「しかも大問題が発生しまして」

「何がありました」

「市長への手紙を利用して伊賀市と連携してくれませんかと二〇〇頁下段⑧みたいなお願いをしたんですけど」

「乱歩をテーマに伊賀地域がひとつにまとまるわけですね」

「平成二十九年十二月八日に二〇三頁下段⑨みたいなお答えが届きました」

「伊賀市と連携する予定はないと」

「それで腐れ市役所のずんべらぼんの無能どもが有能な市民の意見に耳を傾けることなく好きなことぼつかり抜かしとつたらしまいにやしびき倒すぞおツとか思いつつ下段の⑩みたいな市長への手紙を出したんですけど」

「君ちよつと頭を冷やしませんか」

「そしたら次のページから四ページにわたって伊賀市と名張市にまたがる話題で頭を冷やしましょうか」

「それがええと思えます」

います。

それに、12月4日付「市長への手紙」には、伊賀市に対して連携の働きかけを進めていただけない場合には、名張市立図書館による資料収集の具体的な見直しをお示しいただきたい旨も記しました。その点のご回答が頂戴できないのは、いつたいどういうことでしょうか。私が例示した事業は、図書資料および非図書資料（逐次刊行物、ファイル資料、視聴覚資料など）の収集、保管、書誌データの作成と公開、データベースの構築、初出資料のデジタル化、リファレンスサービスなどといったことでしたが、もしかしたら名張市立図書館の関係者には、こうして列記した事業の内容が理解していただけなかったのかもしれない。だったら仕方ありません。もう少し答えていただきやすいことをお聞きいたします。（以下略）

*名張人外境ブログ「名張市職員、市長名義で市民を愚弄」から転載。

江戸川乱歩・横光利一

中 相 作

汽笛とトンネル わが国に探偵小説の基礎を築き、いまも数多くの読者を獲得している江戸川乱歩は、随筆「一頁自伝」に「ピエツと笛の音がして、おもちゃみたいな汽車がゴーツと走って行った、それがこの世で最初の記憶。二歳、伊勢の国亀山町在任の頃である」という幼時の思い出を記している。宿場町だった亀山には明治時代なかばに関西鉄道が敷設され、乱歩は鉄道という文明を生まれたときから身近なものとして育ったのである。

昭和初年から戦前戦中を通じて日本文学の第一線に立ちつづけた横光利一は、長編小説「旅愁」の主人公をトンネル技師の長男として設定した。パリから帰国して東北地方にある母親の郷里を訪れた主人公は、「日本に頭われ出て来た初めての西洋の姿」であるトンネルを遠望し、「トンネルから文化が生じて来る」と確信していた父と、「心魂さえ洋式に変わり、落ちつく土もない、漂う人」になつてしまった自身との違いに深い感慨を抱く。

明治時代に入つて、人や貨物の交通の舞台は道路から鉄

道に移行しはじめる。鉄路はいわば新時代の街道として全国に四通八達し、近代化を支える礎となつた。明治時代後半に生まれ、ともに三重県伊賀地域とゆかりをもつ江戸川乱歩と横光利一は、鉄道に象徴される新文明を享受し、それをもたらしした西洋近代と正面から向き合うことを自覚的に体現した作家である。二人の生涯に日本の近代を生きた知識人の典型を見ることが可能だろう。

乱歩と名張 江戸川乱歩は本名平井太郎。一八九四（明治二十七年）年、三重県名張郡名張町（名張市）に生まれた。平井家は津藤堂藩に仕えた武士の家柄だったが、父繁男は大学を卒業して名張郡役所に勤務、津から名張へ母を招き、妻を迎えて乱歩をもうけた。翌年、繁男の転勤にともなつて一家で亀山に転居したため、乱歩は名張を知ることなく成長し、名古屋で少年期を過ごしたあと、早稲田大学予科に進んで探偵小説の面白さに目覚めた。

一九二三（大正十二年）年、デビュー作「二銭銅貨」で探偵小説界の注目を集め、「心理試験」をはじめとした短編で地歩を固めた乱歩は、昭和初年の出版ブームを背景に大衆小説の分野へ進出、名探偵明智小五郎が活躍する「黄金仮面」などの長編で人気作家として地位を確立し、「怪人二十面相」にはじまる少年小説でも熱狂的な支持を得た。

戦後は江戸川乱歩賞の創設や日本推理作家協会の設立などを通じ、探偵小説の興隆に力を尽くした。

一九三五（昭和十）年前後、旅行中に名張駅で途中下車したのを唯一の例外として、乱歩は名張と無縁なままに過ごしたが、一九五二年、早稲田在学当時から恩人として慕っていた伊賀上野出身の代議士、川崎克の次男秀二に衆議院議員選挙の応援を依頼され、名張町に足を運ぶこととなる。町民は郷土出身の名士を温かく歓迎し、生家跡への案内も買って出た。五〇代後半で初めて、乱歩は自分が生まれた場所を知ったのである。

これをきっかけとして町民有志の手で生誕地碑の建立が計画され、一九五五年に乱歩夫妻を招いて除幕式が営まれた。乱歩は「ふるさと発見記」で名張の町の「昔ながらの城下町の風情」を讃え、「生誕碑除幕式」では「町の人々が、自発的に」碑を建ててくれた好意に感謝を捧げている。死去はその一〇年後、一九六五年のことである。一九八七年、名張市立図書館に江戸川乱歩コーナーが開設され、遺品や著書を展示している。

横光と伊賀 乱歩より四歳年下の横光利一は一八九八年（明治三十二）年、福島県北会津郡東山村（会津若松市）に生まれた。父梅次郎は大分県宇佐郡の出身で、鉄道など

の土木工事を職業としていたために一家は各地を転々とした。一九〇四年、父が仕事で朝鮮に渡ることになり、母、姉とともに三重県阿山郡東栢植村（伊賀市）の母の実家に居留、横光はこの栢植と上野町、滋賀県大津市で少年時代を過ごすことになる。

三重県立第三中学（上野高校）に通った五年間、横光は野球や水泳などの花形選手として活躍したが、校友会誌に発表した「夜の翅」「第五学年修学旅行記」には文学への志向と才能もまた際立っている。当時経験した四歳年下の少女との恋愛のちに「雪解」という小説として対象化されるが、伊賀の風土と気質への複雑な愛憎を交錯させたこの作品からは、伊賀が作家としての内面形成に重要な役割を果たした場であつたこともうかがえる。

早稲田大学予科で本格的に習作を開始、一九二三（大正十二）年の「日輪」と「蠅」で一躍寵児となつた横光は、新感覺派と呼ばれる文芸潮流の先頭に立ち、「機械」や「上海」などの作品で文壇の頂点を極めた。半年の渡欧体験にもとづいて一九三七（昭和十二）年に執筆がはじまつた「旅愁」は、西洋と東洋の対立を主題として時代の激動のなかで書き継がれたが、一九四七年、四九歳で迎えた死によって未完のまま遺された。

隨筆「伊賀のこと」に「私は伊賀が好きである」と書き、長編「春園」で登場人物に漬物は「伊賀が第一等」と喋らせるなど、横光は折にふれて伊賀への愛惜を表明した。再出発を期した戦後最初の著書が旧作を増補した『雪解』であり、絶筆「洋燈」が柘植での少年期を題材としていた点にも、時をへて純化された伊賀への視線が認められる。柘植には一九五九年、「蟻台上に飢えて月高し」の句を刻んだ文学碑が建立された。

旅愁と郷愁 横光の盟友だった川端康成は、弔辞のなかで「西方と戦った新しい東方の受難者」と横光の宿命を表現した。この宿命は西洋に範を取ったわが国の近代化にも深い関わりを有している。敗戦直後の死によって文学者の戦争責任を余儀なく負わされた横光が、「旅愁」に描いた西欧への接近と日本への回帰の先は何を見ていたのか、それは新たなナショナリズムの時代を迎えたこの二一世紀初頭にこそ検証されるべき問題であろう。

乱歩にとつて西洋近代は、ともに合理主義を基盤とした探偵小説と精神分析というふたつのジャンルとして存在していた。論理に支えられた探偵小説の形式に拠りながら、無意識の欲望を暴いたフロイトの理論にも傾倒した乱歩は、隨筆「残虐への郷愁」に「本来の人類が如何に残虐を愛し

たか」と創作の拠りどころを打ち明けている。心理の深層に眠る人類共通の官能に立ち戻ること、乱歩は作品に色褪せない魅力を与え得たといえよう。

ところで、乱歩と横光が実際に顔を合わせたことはあつたのだろうか。乱歩の自伝『探偵小説四十年』によれば、横光も名を連ねた新感覚派映画連盟が「狂った一頁」（一九二六年）につづく第二作として乱歩作品の映画化を企画し、乱歩は新感覚派の作家たちと面会したが、「横光利一氏とは一度も同席しなかつたと思う」という。二人はついに会うことなく、お互いの伊賀とのゆかりさえ知らないまま、それぞれの生を終えたとおぼしい。

【付記】

再録の機会を得たので事実誤認を訂しておく。「二人はついに会うことなく、お互いの伊賀とのゆかりさえ知らないまま、それぞれの生を終えたとおぼしい」と記したのは誤りで、江戸川乱歩推理文庫65『乱歩年譜著作目録集成』（講談社、一九八九年）の昭和五十年度の項に「○横光利一宛ペン書きはがき（文部省、高等学校芸術科書道指導書・表現編、一月）」とあるのを見落としていた。その『昭和四十九年（一九七四年）高等学校芸術科書道指導資

料 表現編』（東山書房、一九七五年）を入手してみたところ、第五章「書道における表現学習の教材」の第六節

拝啓先日は突然御邪魔
いたし色々御話を伺ひ有難
う存じました、同郷の後輩
として今後ともよろしくお
願ひ申上げます、不取敢御
挨拶のみ申上げます、草々

「現代の書」に「江
戸川乱歩」というキ
ャクションを添えた
はがきの通信面が写
真で掲載されていた。
しかし宛名面がない
ため宛先や日付は確
認できない。収録は

拝啓先日は突然御邪魔
いたし色々御話を伺ひ有難
う存じました、同郷の後輩
として今後ともよろしくお
願ひ申上げます、不取敢御
挨拶のみ申上げます、草々

「現在発行されている、高等学校用書道教科書に掲載されたもの」、「書道の学習指導要領の領域においての生活書の代表的なもの」とされているが、「現行教科書に掲載されていないもの」も含まれているとのことだから、乱歩のはがきが実際に教材として教科書に採られたかどうかもじつは判然としない。知り合いの高校の先生に心当たりを調べてもらったが、残念ながらそんな教科書は見つからなかった。とはいえ、二人がいつ、どこで、どんな要件で、といった細部はいつさい不明ながら、実際に対面を果たしたことがあり、お互いの伊賀とのゆかりもよく心得ていたことはこのはがきが証明しているといつていいだろう。内緒でその写真を無断転載し、文面を活字に起こしたうえで、ここに謹んで誤謬を訂正する次第である。

(二〇一八・二・一五)

*初出…木村茂光・吉井敏幸編『街道の日本史34 奈

良と伊勢街道』吉川弘文館、平成十七年

*底本…『横光利一とふるさと伊賀』横光利一生涯

百二十年記念』三重県立上野高等学校同窓会・横光

利一研究会、平成三十年

*註…「付記」の初出は底本。

僕の図書館戦争

民間人作戦

忍法の秘術尽くせり旧庁舎

「しまいにやしびき倒すぞおッ」

「君いつとも頭冷えてませんやん」

「腐れ公務員はとつとと死にさらせやあッ」

「いくら漫才でもゆうてええことと悪いこととありますから」

「責任者出てこおいッ」

「君は人生幸朗師匠ですか」

「市長は何してんのどおッ」

「ほんまに市長さんが出てきてくれたらどないしますねん」

「謝つたらしまいじゃあッ」

「謝るぐらいやつたら最初から偉そう

なこといわんといたらよろしねん」

「おかあちゃん堪忍ッ」

「僕は生恵幸子師匠ですか」

「みたいな感じで僕も年齢を重ねてい

よいよ人格が円満になりました」

「もうこてこての昭和の漫才ですな」

「昔はたしかに名張の図書館は乱歩関

連資料の収集はきれいさつぱりやめま

したゆうてさつさと宣言したらええね

ん思てました」

「平成十五年やつたかにそれ提案した

ゆうことでしたけど」

「まともな収集なんか全然できてない

んですからそうするしかないと当時は

考えてたわけです」

「その考えが変わってききましたか」

【①】

旧南庁舎関連費削る 伊賀市予算案、
議会で可決

伊賀市議会は二十二日の本会議で、二〇一九年度一般会計当初予算案と補正予算案を賛成多数で可決した。十二日の予算委で旧南庁舎関連費が盛り込まれた当初予算案全体を「否決すべきだ」としたことを受け、市は関連費を削除する補正予算案を提出した。旧南庁舎を活用した複合施設の開業は、当初予定した二〇年七月から一年近くずれ込む見通しとなった。

削除したのは、昨年九月議会でも否決された旧南庁舎の整備実施設計費九千二百万円。旧南庁舎内に忍者体験施

「これはやつぱり年齢を重ねたせいや
と思うんですけど」

「君ももう前期高齢者ですから」

「それとなく相談を持ちかけられるこ
とも増えてきましたし」

「相談といえます」と

「自分の蔵書を図書館に寄贈したいん
ですけどどんなふうにしようか」

「いわゆる断捨離ですか」

「たとえば平成二十七年の秋」

「相談がありましたか」

「名張市出身で名古屋にお住まいの後
期高齢者のかたでしたけど」

「やつぱり蔵書を処分したいと」

「じつは名古屋市区の市立図書館に
寄贈して全部運び込んであるんだと」

「ほなそれでよろしがな」

「ところがいつまで待ってもその図書
館の廊下に寄贈した蔵書の段ボール箱
が積まれたままなんだと」

「その図書館もやる気ないんですか」

「てゆうかそんな本いりませんねん」

「図書館やのに本がいりませんか」

「蔵書の寄贈ゆうのは図書館にとつて
じつはありがた迷惑なんですね」

「なんですかねん」

「いくら寄贈してもらっても図書館の蔵
書として利用できるのは全体の二割程
度やといわれてますし」

「残りの八割は処分ですか」

「二割のほうかて開架に並べるまでに
いろいろ手間がかかりますしね」

「スペースも必要です」

「それで僕は名張の図書館へ行つてそ
のかたの意向を伝えたくんですけど」

「色よい返事はありませんでしたか」

「一部の地域資料を除いて基本的に図
書の寄贈は受け付けてないそうです」

「それも仕方ないかもしれませぬ」

「そうこうしてらうちにその高齢者の
かたがお亡くなりになりました」

「えらいまた急な話で」

設を整備するための設計費など二千二
百万円はそのまま盛り込まれた。これ
に対し、「旧南庁舎の保存・活用が議会
でも認められ、一体的に進めるべきも
の」として、予算執行の凍結を求める
付帯決議案が賛成多数で可決された。
付帯決議に法的拘束力はない。

【②】

**伊賀旧庁舎 市文化財に やつと／
答申から2年以上 改修 市議会反対
で白紙に**

伊賀市教育委員会は27日、保存か、
取り壊しかの議論が続いている市の旧
庁舎（旧上野市庁舎、上野丸之内）を、
市文化財に指定したと発表した。20
17年2月の市文化財保護審議会の答
申から2年以上経過する中、市議会の
反対で、旧庁舎改修計画が白紙に戻っ
たばかり。このタイミングでの指定に
対し、一部の市議からは「市側の市議
会への仕返しではないか」と反発の声
が上がっている。

旧上野市庁舎は、近代建築の巨匠
ル・コルビュジエに学んだ坂倉準三が

「そのかたの場合は乱歩となんの関係もない話やっただけですけれど」

「やっぱり乱歩関係でも相談がありませんか」

「以前から資料調査なんかでお世話になつてきた各地の乱歩ファンやコレクターのみなさんからね」

「年々お年を召されますから」

「いづれ乱歩関連のコレクションをすべて名張の図書館に寄贈したいんですけどどうでっしゃろと」

「名張の図書館で保管して活用してくれませんか」

「けど寄贈してもらたかて慶應義塾大学推理小説同好会OB会のみなさんの二の舞を演じるだけですから」

「それではあきません」

「しかもこれは僕自身の問題でもあります」

「君も君が持つてる乱歩関連資料を引き取ってもらいたい」と

「ぼっくり逝つたらあつというまに散逸しますから」

「そろそろその日も近いでしょうね」

「僕が購入した以外にいろいろ頂戴した本や雑誌なんかもありますし」

「それが散逸したら君を見込んで資料を譲ってくれた人たちの好意を無にすることになりませう」

「ほかに初出のコピーとかもですね」

「それはなんですかね」

「小説はたいい雑誌や新聞に発表されてそのあと本になるわけです」

「最初に出したものが初出ですか」

「随筆なんかやと本にならずに初出だけで終わるのも結構あります」

「それ読もうと思つたら初出の雑誌や新聞を探さなあかんわけですね」

「かりに乱歩関連資料を収集してる図書館があるとしたら乱歩作品の初出も当然視野に入れなあきません」

「昔の新聞や雑誌を集めるんですか」

設計し、1964年に完成。屋上庭園、水平連続窓などの「近代建築5原則」を踏まえ、昭和時代を象徴する建物とされる。

③

萩原健一さん死去 歌手・俳優「傷だらけの天使」 68歳

「ショーケン」の愛称で親しまれた歌手・俳優の萩原健一（はぎわら・けんいち、本名萩原敬三へはぎわら・けいぞう）さんが、26日午前、消化管間質腫瘍（しゅよう）のため東京都内の病院で死去した。68歳だった。葬儀は親族だけで営まれた。故人の遺志で、お別れの会の予定はないという。

④

お世話になっております。

ご多用中恐縮ですが、ひとつご教示ください。

名張市立図書館にいわゆる民間人館長制度を導入する場合、どういったプロセスが想定されるでしょうか。

導入していただきたい、とお願いしているわけではありません。

「そんなにとっても無理です」

「ほなあきませんやん」

「けどどうしても初出を確認したいという人は存在しますからそういう人は図書館を回って新聞や雑誌のコピーを集めます」

「コピーで初出確認するわけですか」

「用が済んだら何かの役に立ててくださいゆうてそのコピーが僕のもとに送られてくる必要があります」

「そういうの結構ありますのか」

「プラスチックの収納ケースに入れて

納屋に積んであります」

「積んどいてどうしますねん」

「全部スキャンしてデジタル化したうえで公開したいんですけど」

「スキャン画像をパソコン画面で誰でも読めるようにするゆうたらえらい手間かかりますがな」

「そんなにとっても無理です」

「無理なことばっかりですがな」

「けど国立国会図書館ではスキャンした資料をデジタルコレクションとして公開してますから」

「時代の流れはデジタル化ですか」

「三重県立図書館かて所蔵してる近世資料を中心にデジタルライブラリーとして公開してます」

「そしたら君が持つてる初出のコピーも名張の図書館に寄贈してデジタル資料として公開してもらうとか」

「そんなことできると思いますか」

「とても無理でしょうね」

「かりにそれを提案しても理解できるお役人がひとりもいませんし」

「財政難で予算もありません」

「だいたいやる気がありませんから」

「ないないづくしですな」

「とにかく名張市のお役人には何ひとつ期待できません」

「こうなるとやっぱ伊賀市と連携するとかせんとあかんのちやいますか」

ひとりの市民が、

「名張市立図書館には、日本語の読み書きさえ怪しいお役人なんかではなく、全国から公募して審査の結果選任された優秀な民間人が館長を務めるシステムが必要だ」

と思いつつ名張市に提案し、その提案が民間人館長制度を導入するための条例制定にこぎつけるまでの過程はどういったものになるでしょうか、とお聞きしている次第です。

提案するためには、たとえば、市議会議員の先生がたにお願いして条例の制定を議員提案していただく、といった方法が考えられます。

とはいえ、これは平成27年10月の話になります。が、名張市議会の九人の先生がたが佐賀県の武雄市図書館に視察の足をお運びになりましたので、わざわざそんな遠方の図書館までお出かけになるほどですから、よほど図書館に興味をお持ちであり、また、図書館に関する理解も深くていらつしやるのであろうと推察したわたくしは、名張市

「その伊賀市は蝸牛角上の争いで揉めつづけです」

「空き家になった旧庁舎の問題」

「今年の三月議会で可決された新年度の一般会計当初予算には旧庁舎関連予算が盛り込まれませんでした」

「市長さんは盛り込みたかつたんですけど議員さんがつっぱねました」

「三月二十三日付中日新聞のウェブニュースを二一〇頁下段①でどうぞ」

「旧庁舎を活用した複合施設の開業は一年ほど遅れることになりました」

「しかし伊賀市側も黙ってません」

「逆襲に転じましたか」

「三月二十八日付読売新聞のウェブニュースを二一一頁下段の②でどうぞ」

「旧庁舎が文化財になったんですね」

「これぞ伊賀忍法文化財指定です」

「いったい何がどうなりますねん」

「旧庁舎は解体できなくなりました」

「市側が一本取ったゆうとこですか」

「いやもう一本でも千本でも好きなだけ取り合いして伊賀名物のいがみ合いをつづけてもろたらええんいです」

「あれもやっぱり土地柄でしょうね」

「こうなると名張市が伊賀市の合併に加わらなかつたのは大正解でした」

「いがみ合いはごめんですから」

「しかしそんなことより次の日のニュースがまた衝撃的でした」

「何がありました」

「三月二十九日付朝日新聞のウェブニュースを二一二頁下段の③でどうぞ」

「六十八ゆうのは早すぎますけど」

「追悼の意を込めてショーケン風のラストダンス一曲行つときましょか」

「そうゆうのいいですから」

「それで僕もほんまにそろそろやなとあらためて実感いたしまして」

「目の黒いうちに名張市立図書館の乱歩関連資料収集に決着をつけときたいゆうとこですか」

立図書館のあらまほしき運営にその先生がたのお力添えをたまわれればありがたいと考え、まず、強い者にはものすごく弱いが弱い者にはものすごく強い男こと〇〇〇〇先生のブログにコメントを投稿して、ご助力をお願い申しあげました。

しかし、コメントは掲載されることなく黙殺されてしまい、それならば別の先生に、と方向を転換、公明党のまたぐらのマリアこと〇〇〇〇〇〇〇〇先生にメールをお出しして、同様をお願いを申しあげましたところ、またしても梨のつぶて。

私は以前から、人間性にかなり問題があると多くのみなさんから指摘されておりますので、そういつたよろしくない人間性がこうした場合にどなたからも手助けしていただけないという悲しむべき事態を招いてしまったものと思われませんが、それはともかくとして、市議会議員の先生がたの協力を求めたり、あるいは、一般市民のみなさんから署名を集めたり、はたまた、江戸川

「伊賀市と連携するゆうのは単なるスペース狙いの話でした」

「空き家になった旧庁舎が図書館になるのであればその一角に乱歩関連資料用のスペースをいただきたいと」

「けど空き家やつたら名張のまちなかにかてごろごろしてるんです」

「たしかにたくさんあります」

「乱歩関連でゆうたら新町の榎田医院が空き家ですから」

「乱歩の生家があったとこですか」

「平成二十八年末で廃院になってしまいまや空き家なんです」

「改修したら活用できますね」

「そんなことしたかて旧細川邸やなせ宿の二の舞を演じるだけです」

「また二の舞ですか」

「名張市が平成十七年に名張まちなか再生プランゆうのを策定しまして」

「名張のまちなかに昔のようになにぎわいを取り戻しましょうと」

「その目玉になった事業が新町に残っていた旧細川邸の活用です」

「あれもなんやわけのわからん公共施設になって閑古鳥鳴いてますけど」

「名張市における官民双方の叡智を集めてプランを策定しながら事業は見事なまでの大失敗に終わりました」

「資料の収集も空き家の活用も名張市にはどつちも無理ですか」

「素材はいろいろあってもそれを活用できる人材がいらないんです」

「結局そうゆうことでしょうね」

「そこで僕は考えました」

「またよからぬことを考えましたか」

「名張市にろくでなししかいないのであればよそから有能な人材に来てもらう方がいいのではないか」

「どうやって来てもらいますねん」

「それで四月一日に二二二頁下段④の市長への手紙をお出ししました」

「なるほど民間人館長制度ですか」

乱歩が恩人として慕った川崎克の令孫でいらつしやる川崎二郎先生に「から十までおすがりしたり、いくつか道はありましようけれど、そうした煩はすべて避け、とりあえずこの「市長への手紙」を利用して提案をお伝えすることになるとは思われませんが、ひとりの市民のそうした提案がどういうプロセスをたどって実現に至るのか、わかりやすくご教示いたなければ幸甚です。」

なお、名張市立図書館の民間人館長制度導入に関する動きは実録漫才「僕の図書館戦争 民間人作戦」として、近い将来に発行予定の個人誌「伊賀一筆」復刊兼再最終号に掲載する予定です。

やはり同誌に掲載する「僕の図書館戦争 名張死闘篇」は、こうなっております。

<http://www.e-net.jp/user/stako/20190224a.pdf>

よろしくお願い申しあげます。
新元号令和が発表された日に。

このつづきは令和元年の適当な時期に発行される予定の「伊賀一筆」復刊兼再終刊号（通巻二号）でお読みください。なお、この抜刷では罪一等を減じて平成から令和への改元に祝意を表すべく、公職者ならびに公職候補者の姓名を伏せ字としたことをお断りしておきます。

「伊賀一筆」創刊兼終刊号（通巻一号）は平成二十六年（二〇一四）十二月十日に発行されました。同七年（一九九五）創刊の地域雑誌「伊賀百筆」（伊賀百筆編集委員会発行）からの暖簾分けで誕生した個人誌です。すでに品切れとなっておりませんが、国立国会図書館、ミステリー文学資料館、神奈川近代文学館、三重県立図書館、名張市立図書館などで閲覧していただけます。

この抜刷は名張市役所秘書広報室、名張市教育委員会事務局、名張市議会事務局の三者による校閲を経て（平成三十一年四月八日、名張市公式サイト「市長への手紙」を利用して「あらたふと資料収集五十年」のPDFファイルをお示しし、事実誤認などの校閲をお願いしました）発行される名張市公認の冊子です。ご高配をたまわった〇〇〇〇市長、〇〇〇〇教育長、〇〇〇〇市議会議長をはじめ関係各位に深甚なる謝意を表します。

奥付

あらたふと資料収集五十年

伊賀一筆 復刊兼再終刊号（通巻二号）

改元記念抜刷先行版

令和元年五月一日発行

発行所 名張人外境

〒五一八―〇七五二

三重県名張市蔵持町原出六四三番地

電話〇五九五―六四―一四四七

電子メール stako@e-net.or.jp

編集兼発行人 中 相作

誌面設計・組版 犬の小春

印刷・製本 上野印刷株式会社

〒五一八―〇八二三

三重県伊賀市四十九町二二一〇番地

電話〇五九五―二一―〇八〇一（代）

なばりのたからもの第十号

「そんなこんなでわあわあゆうてるあいだに改元ということになりました」

「五月一日に新しい元号がスタートしました」

「えらい騒ぎになりましたけど」

「日本全体が明るい祝賀ムードに包まれましたね」

「日本人はこんなんで大丈夫かと心配になるほど白痴的な浮かれようで」

「でもおめでたいことですから」

「そうこうするうちに五月十二日」

「何がありました」

「名張ユネスコ協会の新年度総会が開かれました」

「君ユネスコと何か関係があるんですか」

「じゃーん」

「なんですねん」

「皆の者頭が高い控えおろう」

「君は助さん格さんですか」

「なばりのたからもの第十号です」

「なんですねんそれ」

「その総会の席上で僕が名張ユネスコ協会からなばりのたからもの功労者に認定していただいたんです」

「君のどこがたからものすねん」

「僕にもさっぱりわかりません」

「名張の嫌われ者とか名張の困り者とかやったらわかりますけど」

「三月に名張ユネスコ協会のかたから電話で連絡がありました」

「どんな連絡でした」

「あなたはなばりのたからもの功労者の候補者に選ばれましたからこれまで業績をまとめて提出してください」

「君に業績とかあるんですか」

「死ぬほどありますからごく大きっぱなところを書き出したのをさらに要約したのが下段の④でございます」

「よう恥ずかしげもなくこれだけ並べられたもんですな」

④

■郷土史家として――

2004年から伊賀まちかど博物館「はなびし庵」(中町)で上演される歴史影絵劇の台本を担当し、「乱歩誕生」「名張忍法帖」など八作を提供。新作「赤目滝能楽案内」は2019年春に公開の予定。

2005年から三年間、県立名張高等学校で非常勤講師として、「マスコミ論」を指導、校外学習で生徒とともに旧町地区を調査し、その成果をA4判のリーフレット「名張まちなかなび」にまとめて地域の魅力を発信した。

2008年、名張ロータリークラブの依頼を受け、名張市内の中学生に江戸川乱歩を紹介するA3判のリーフレット「少年少女乱歩手帳」を制作、名張と乱歩の関係を平易に説明した。

■漫才作者として――

1997年から地域雑誌「四季どんぶらこ」(暮しの工房川上発行)、「伊賀百筆」(伊賀百筆編集委員会発行)

「それで厳正な審査の結果認定していただけることになりました」

「そらよろしおましたな」

「頂戴した認定証には下段⑤のとおりお書きいただいてあります」

「乱歩と名張の魅力を発信ですか」

「それほんまなんでしようか」

「僕に聞かれても困りますけど」

「たぶん名張ユネスコ協会のみなさんは僕のことを根本的などころで誤解していらつしやるんですけど」

「名張市役所行って君のことリサーチしたら一発で却下やつたでしょうね」

「でもまあ頂戴できるものはなんでも気持ちよう頂戴しておくのが人の道ゆうもんですから」

「そんな人の道聞いたことないですけど」

「認定証をいただいたあとは記念講演を仰せつかりまして」

「またあほなこと喋りましたか」

「講演をお聞きいただいたかたにはおみやげもお受け取りいただきました」

「どんなおみやげで」

「この漫才の一八二頁から二一五頁まで抜刷を印刷製本して無料でお持ち帰りいただいたんです」

「なんでそんなことしますねん」

「僕がどんな人間か市民のみなさんに知っていただきたいと思ひまして」

「自分はなばりのたからものにふさわしい人間ではないんですと」

「こんな人間でもなばりのたからものになれるんですからみなさんも希望を捨ててはいけませんよと」

「誰も捨ててない思ひますけど」

「五月八日にははなびし庵で歴史影絵劇の新作も披露されました」

「新聞の伊賀版にも出てましたね」

「なばりのたからもの第十号はきょうも行く」

「なんや鉄人28号みたいですなそれ」

などに地域住民に身近なテーマで漫才を執筆し、地域社会に明るい笑いを提供している。

2009年、吉本興業が主催する沖縄国際映画祭の出品作「鬼」の脚本を執筆、赤岩尾神社（滝之原）での撮影をプロデュースした。出演は山田スミ子（故人）、たむらけんじ。収録にあたっては滝之原地区と名張能楽振興会の全面的な協力を得た。

■編集者として――

1995年から2008年まで名張市立図書館乱歩資料担当嘱託を務め、同館の収集資料にもとづいて江戸川乱歩リファレンスブック1『乱歩文獻データブック』、2『江戸川乱歩執筆年譜』、3『江戸川乱歩著書目録』を編集した。

2004年、三重県と旧伊賀地域七市町村が芭蕉生誕三百六十年にちなんで実施した「生誕三六〇年芭蕉さんがゆく秘蔵のくに伊賀の蔵びらき」事業の一環として『子不語の夢 江戸川乱歩小酒井不木往復書簡集』（乱歩蔵び

「そうかと思うと五月八日におとなり伊賀市におきましては」

「何がありましたか」

「今年二月に結成された伊賀文学振興会の記者会見です」

「そんな会あるんですか」

「翌九日付毎日新聞のウェブニュースが下段の⑥となっております」

「なるほど岸宏子さんがらみの話ですか」

「岸宏子さんは平成二十六年に九十二歳でお亡くなりになりました」

「NHKのテレビドラマとかお書きになつてた人ですね」

「略歴は下段⑦の五月十八日付朝日新聞ウェブニュースでどうぞ」

「その岸さんの遺産がまるつと伊賀市に託されました」

「岸さんがお住まいやった家の土地建物と遺産がざつと一億円」

「一億円ゆうたらしいしたもんで」

「伊賀の文学振興に役立ててほしいという岸さんの遺志を受けて岸宏子文学振興基金が設立されました」

「それが四年以上もほつたらかしやつたわけですか」

「伊賀市も名張市もお役人ゆうのは手に負えんとなつたら平気でずるずるほつたらかしにするんですね」

「それで市民サイドから活用策を提言したいゆう声が出たと」

「伊賀市も名張市もお役人のみなさんはいええだけずんべらぼんですから」

「よそのお役人までずんべらぼん扱いすることないやないですか」

「さすがに伊賀市もこれではまずいとうつすら気がついたんでしようね」

「何か動きがありましたか」

「五月十二日付中日新聞のウェブニュースを下段の⑧でお読みください」

「基金四十二万円で岸宏子文庫を開設したんですね」

らぎ委員会発行)を監修、探偵小説史研究の貴重な資料として世に送った。

2014年、江戸川乱歩の生誕百二十年を機に個人誌『伊賀一筆』創刊兼終刊号を発行、乱歩が学生時代にまとめた肉筆の手製本『奇譚』を活字化して掲載した。『奇譚』は2016年、藍峯舎(東京)から出版された。

2017年、小学館(東京)が配信した電子書籍『江戸川乱歩電子全集』の随筆・評論の巻(全二十巻中五巻)の監修を担当し、第十六巻『随筆・評論 第一集』にcafe mink(上八町)で採録されたインタビュー「カリスマ囑託の驕慢と頹落」が収録された。

【5】

あなたは名張で誕生した江戸川乱歩が執筆した多くの探偵小説などを研究しその著書を整理されると共に郷土名張の歴史を材にした物語を創作し市内外に乱歩と名張の魅力を長年に亘り発信する努力をされ乱歩文学の振興に尽力されました

よつてその功績に対し「なばりのた

「お茶を濁してるだけの話なんです」
「たしかにうわつつらを取り繕つてるだけの感じですね」

「伊賀市のお役人も名張市のお役人もお茶を濁させたら目を見張るほど抜群の働きを示してくれますから」

「そこまでゆうことありませんがな」

「ほんまに手前どもは何も考えさせていただかないことにさせていただいておりますと顔に書いてありますからね」

「もうええゆうのに」

「とにかく最初に考えておかなければならないことを何ひとつ考えようとせずうわつつらだけお茶を濁していつべん叱り飛ばしたるか思ってるうちに異動でどっか行ってしまいますから」

「そしたら民間の伊賀文学振興会は提言とか顕彰とか研究とか広報とかちゃんとできるんですか」

「まず無理です」

「それではあきませんがな」

「なにしろ伊賀市にしても名張市にしても知性にはまるで無縁な土地柄ですから」

「またそれですか」

「それにそもそも文学ゆうのがどうゆうものなのかよくわかりませんし」

「たしかに漠然としてますわね」

「いったい何がどうなつたら文学振興が果たされたことになるのか」

「そのあたりも非常に曖昧です」

「だいたい文学そのものの相場がもうだだ下がりですから」

「そうなんですか」

「そこの大学でもいまや文学の肩身はものすごく狭いですからね」

「なんでですわね」

「世の中が貧しくなつてなんらかの実に結びつかない研究はだんだん白眼視される傾向にあるみたいですよ」

「医学とか科学技術とかの研究は世の中に貢献しますけど」

「からもの」と認定し永く顕彰します

【⑥】

伊賀文学振興会 発足 ゆかりの作家を顕彰、研究 故・岸さん宅の活用策も提言 来月総会 / 三重

伊賀地域ゆかりの作家の顕彰や、伊賀を舞台にした作品の研究、広報などを目的に発足した「伊賀文学振興会」は8日、ハイトピア伊賀（伊賀市上野丸之内）で6月1日に設立記念総会を開くと発表した。市在住の作家、故岸宏子さんが市に遺贈した土地、家屋や基金の活用策が市から提示されない中、活用策を提言したり、利用法が決まった場合の事業委託先になつたりすることも視野に入れている。

【⑦】

三重 伊賀文学振興会が発足 岸氏の遺産有効活用に向け

岸さんは旧上野町生まれで、作家横光利一は父のいとこにあたる。1942年に懸賞小説に「醜女」が入賞し作家デビュー。伊賀に住み続けながらNHK銀河テレビ小説「巣箱」や、小説

「文学はそうではないですから」

「そしたら文学でなんの役に立ちますねん」

「たとえば文学に親しむと心が豊かになりますとかそうゆうほんやりしたところとかいえないわけです」

「心が豊かになるとかいわれてももうひとつピンと来ませんけど」

「とにかく意味不明なわけなんです」

「その意味不明なものを振興したりできてるものなんですか」

「そんなん雲をつかむような話ですけどひとつ耳寄りな情報がありました」

「といいますと」

「ふたたび五月十二日付中日新聞ウェブニュースを下段の⑧でどうぞ」

「とくに変わったことは書いてないようですけど」

「伊賀ゆかりの作家として乱歩の名前もあげてもらえます」

「たしかにそうですね」

「つまり伊賀文学振興会の守備範囲には乱歩も入ってるわけなんです」

「それがどないしました」

「一億円ですよ一億円」

「岸宏子文学振興基金の話ですか」

「一円置くのとちごて一億円ですよ」

「そんな人のギャグばくつたらあきませんかな」

「乱歩関連資料を収集しておりますと公言しながら一円の予算もつけていない名張りに比べたら」

「伊賀市には一億円が転がっていると」

「一円置くのとちがいますよ」

「それはもういいですから」

「指をくわえて見ている法はありません」

「どないしますねん」

「伊賀文学振興会が乱歩も素材にして活動をつづけたいというのであれば」

「伊賀ゆかりの作家の研究とか継続的な事業をやるゆうてくれますけど」

「若き日の芭蕉」などを手がけた。岸さんの遺言を受け、市は寄付金約1億1633万円で「岸宏子文学振興基金」を設立。旧宅の土地建物や蔵書の寄付も受けている。

【⑧】

地域の文豪の魅力伝える「伊賀文学振興会」設立

◆阿山図書室に寄贈文庫開設

伊賀市は阿山図書室（川合）に岸さんの著書や愛読書四百七十四冊を並べた「岸宏子文庫」を開設した。岸さんから寄贈された遺産で立ち上げた基金を初めて活用した。

文庫は寄贈された約千二百冊のうちの一部で、四月から図書室の一角に並ぶ。著書は「若き日の芭蕉」「荒木又右衛門」「嘘と明日があればこそ」「九鬼水軍物語」「忍び歌」「本居家の女たち」など二十冊余。そのほかの大半が愛読書や蔵書で、郷土の歴史に関する本も多数含まれる。

本に貸し出し用のバーコードを取り付け四十二万円を基金から取り崩した。

「その一環として名張市立図書館の乱歩関連資料収集の肩代わりをしてもらえないものかと」

「名張市立図書館が伊賀市やのうて伊賀文学振興会と連携するわけですか」

「ただしいろいろな問題もありまして」といいますと

「伊賀文学振興会は海のものとも山のものともつかない任意団体なんです」

「まだ発足したばかりですから」

「極端にゆうたらいつ解散してもおかしくない団体です」

「それはそうかもしれません」

「そんな団体が公共図書館の役割を肩代わりできるのかどうか」

「将来にわたって永続的な資料収集ができるのかどうかゆうことですか」

「その点はかなり怪しいと見るべきでしょうね」

「君も一億円に目がくらんで余計なことをせんぼうがええのとちがいますか」

「ところで名張市の話ですけど」

「話題がころころ変わりますな」

「四月一日に送信した二二二頁下段③の市長への手紙の件です」

「お答えをいただきましたか」

「条例制定のプロセスをお聞きしたんですけど民間人館長制度の導入は予定しておりませんゆう回答でした」

「また先回りしたお答えですか」

「ですからもう一度同じことをお聞きしたんですけど」

「お答えはどんなでした」

「五月七日に届いた回答にもやっぱり下段⑩が書かれておりました」

「導入は予定しておりません」と

「なんなんですかねこれは」

「君もう名張市役所の人からまともに相手してもらてないんですね」

「ここにおわすなばりのたからもの第十号をどなたと心得る」

「君は水戸のご老公なんですか」

図書室の担当者は「ぜひこの機会にゆかりの作家の作品に触れてほしい」と呼び掛けている。

【⑨】

伊賀地域ゆかりの作家は、推理小説家江戸川乱歩や「名張少女」の田山花袋、「忍ぶ糸」の北泉優子さん、芥川賞作家伊藤たかみさん、ミステリー小説家麻耶雄嵩（まやゆうたか）さんらが活躍。司馬遼太郎の「梟（ふくろう）の城」といった伊賀忍者を題材にした作品も多い。福田さんは「伊賀の文学作品を通して地元を再発見できたら。若い人にもぜひ仲間に加わってもらい、継続的な事業にしていきたい」と期待した。

【⑩】

ご提案いただきました民間人館長制度は、平成31年4月1日付けで頂戴しました市長への手紙でもご回答いたしました。が、本市では現段階において民間人館長制度の導入は予定しておりません。

このつづきは令和元年の適当な時期に発行される予定の「伊賀一筆」復刊兼再終刊号（通巻二号）でお読みください。なお、この抜刷では罪一等を減じて平成から令和への改元に祝意を表すべく、公職者ならびに公職候補者の姓名を伏せ字としたことをお断りしておきます。

「伊賀一筆」創刊兼終刊号（通巻一号）は平成二十六年（二〇一四）十二月十日に発行されました。同七年（一九九五）創刊の地域雑誌「伊賀百筆」（伊賀百筆編集委員会発行）からの暖簾分けで誕生した個人誌です。すでに品切れとなっておりませんが、国立国会図書館、ミステリー文学資料館、神奈川近代文学館、三重県立図書館、名張市立図書館などで閲覧していただけます。

この抜刷は令和元年五月十二日、名張市総合福祉センターふれあいで開催された名張ユネスコ協会講演会の終了後に配布した抜刷を増補したものです。六月一日にハイトピア伊賀で開かれる伊賀文学振興会設立総会で配布するために増補篇として発行いただきました。編集兼発行人はただの一円も出さなくて済みました。伊賀文学振興会の関係各位に深甚なる謝意を表します。

奥付

あらたふと資料収集五十年

伊賀一筆 復刊兼再終刊号（通巻二号）

改元記念抜刷先行版増補篇

令和元年六月一日発行

発行所 名張人外境

〒五一八―〇七五二

三重県名張市蔵持町原出六四三番地

電話〇五九五―六四―一四四七

電子メール stako@e-net.or.jp

編集兼発行人 中 相作

誌面設計・組版 犬の小春

印刷・製本 上野印刷株式会社

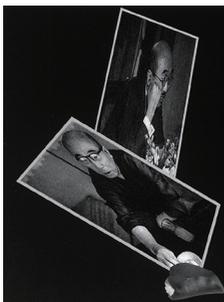
〒五一八―〇八二三

三重県伊賀市四十九町二一〇番地

電話〇五九五―二一―〇八〇一（代）

第19回本格ミステリ大賞 【評論・研究部門】受賞

乱歩謎解き クロニクル



中相作 *naka shosaku*

乱歩はなぜ自伝を執筆したのか？
そして乱歩最大のトリックとは？

「本格探偵小説」「怪奇趣味」「猟奇趣味」……容易に全体像を掴ませない作家・江戸川乱歩の生涯を、横溝正史ほか同時代の登場人物たちを絡めながら、さまざまな角度から辿ることによって、その秘められた側面をあぶりだす画期的な謎解き評伝。

言視舎

乱歩謎解きクロニクル

- 目次 涙香、「新青年」、乱歩
江戸川乱歩の不思議な犯罪
「陰獣」から「双生児」ができる話
野心を託した大探偵小説
乱歩と三島 女賊への恋
「鬼火」因縁話
猟奇の果て 遊戯の終わり
ポーと乱歩 奇譚の水脈

「僕はなばりのたからもの第十号だ」（著者談）

言視舎

本体2200円

ISBN 978-4-86565-118-8